

## ●佐久鉄道をつくる

一九一四（大正三）年五月、富太が社長となって佐久鉄道株式会社がつくられた。木内吾市（大沢）、黒沢睦之助（穂積）、阿部四之助（岩村田）らが役員となって計画をたてた。佐久の七八五人が五〇〇〇株を買って、二五万円の資本金が集まった。中込や岩村田では駅の用地を寄付し、各村役場や南・北佐久郡会も補助金を出して佐久鉄道の建設を助けた。

工事は小諸駅からはじまり、三岡―岩村田―中込へと、レールを敷き鉄橋をかけて、起工式から八ヶ月余で完成させるスピードぶりであった。

一九一五（大正四）年八月八日、長い煙突のC型蒸気機関車に引かれた祝賀列車は、見物に集った大勢の人々の待つ中込駅に着いた。駅前には佐久鉄道の本社旅館や店などが建ち、汽車に乗る人々にぎわった。



中込駅前にあった佐久鉄道本社

中込から小諸までは一九銭（特等は二九銭）であったが、ものめずらしさもあって乗る人が多く、一年で二万円の黒字となった。勢いをえた佐久鉄道は、中込から羽黒下までを、その年の十二月に開通させた。羽黒下から南へは、馬流で大きな石を

取りのぞき、千曲川にそったかたい岩をけずって、一九一九（大正八）年に小海まで開通させた。

## ●鉄道によって佐久が変わる

佐久鉄道の開通によって、多くの繭や生糸のほか、米や酒、材木や石、生きた鯉なども送り出された。鉄道は、馬車や荷車より早く大量に人や荷物を運べたので、産業が発展した。

これまで汽車に乗るには、歩きか馬車で御代田駅まで行かなければならなかったが、小諸で乗り換えて、東京や長野へ楽に行けるようになり、駅のまわりには新しい街ができて、

村や町の形が変わった。中込村は駅前の新しい道路に沿って商店が建ち並び、人口が増えたので一九一九（大正八）年に中込町となった。鉄道が千曲川の東を通ったことから、三反田

（白田）・羽黒下・土村（小海）にも駅前集落が生まれ、それまでの佐久甲州街



法被姿が正装だった保線従業員



佐久鉄道で使われていた機関車

道にそった集落と、千曲川をはさんで対に並んだ街ができ、日本では珍しい「双子集落」が生まれた。

## ●今も走り続ける小海線

富太や重役たちは、佐久鉄道を小海から南へのばして、中央線の小淵沢へ結ぼうとする計画をもっていた。しかし、小海から南は千曲川の谷が険しく、野辺山高原へのぼる坂は急で、鉄道をつくる技術や資金が足りなかった。

一九二〇（大正九）年に繭や米の値が下がる経済不況となり、鉄道の収入が減った。佐久鉄道ではガソリンカーを走らせたり、社長や重役たちの給料を減らすなどの努力を続けたが、経営は苦しくなるばかりであった。そんな時、一九二八（昭和三）年に、富太は病のため八〇歳で亡くなった。

佐久鉄道は、一九三四（昭和九）年国に買収され、小海線となって今も佐久高原を走り続けている。

（小林 收）

### 参考文献

木内政太郎『佐久名流評林』佐久名流評林著作部

平賀村誌刊行委員会編集部『平賀村誌』

平賀村誌刊行委員会

佐久市志編纂委員会『佐久市志』佐久市志刊行会

『長野県蚕糸業統計』

肖像写真提供

長野県議会事務局

## 佐久の先人たち⑦

### 佐久鉄道をつかった

おおいとみた  
**大井富太**

(1868~1928年)



明治になって佐久へ信越線が入ってきたが、北の浅間山のふもとを通過していた。南佐久の人々は大井富太を中心に、みんなの力を合わせて、小諸から小海まで蒸気機関車を走らせ、人々に便利を与え、産業を発展させた。

#### ●議員となつて働く

大井富太は一八六八（明治元）年平賀村（現佐久市平賀）で生まれた。長い武士の世が終つて新しい時代が始まつた年であった。平賀学校を卒業した富太は、新しい学問を志し、師範学校の予科と東京の明治法律学校（現明治大学）で勉強した。しかし、父が病気で亡くなったので、平賀の実家へもどつて、農業のかたわら、蚕種さんしゆのつくりにはげんだ。

富太は一八九五（明治28）年村人たちにおされて、平賀村の村会議員に当選し、二年後には南佐久郡会議

員になって、道路や学校を新しくするために力をついた。富太の意見や人柄は、人々の信頼を得て、三三歳の若さで長野県会議員に当選し、一九一九（大正8）年までに五回当選した。明治四四年からは県会議長となつて、長野県の師範学校や工業試験場を新しくし、千曲川の堤防工事を決めるなど、県政でも活躍した。

#### ●製糸場を大きくする

富太は佐久の人々の暮しを良くするためには、養蚕ようさんと製糸を盛んにすることが大切だと考えた。平賀村には一八九〇（明治23）年から水車を廻して繭まゆから生糸せいしをこつていた山岡製糸場があった。富太は一九〇三（明治36）年から資金を出して山岡製糸の重役となり、収益を上げ、釜数を増やして工場を大きくした。

一九〇六（明治39）年には社名を佐久製糸合資会社さくせいしと変え、富太が社長となった。この会社は四〇釜の製糸場のほか、揚返場あげかえしや繭まゆ庫くらをもつていた。



佐久鉄道案内（大正12年 香川県立ミュージアム蔵）

また、野沢・白田・大沢などにも製糸場をつくり、糸いとの技術を習つ工場も建てた。製糸場とられた細くて白い生糸せいしは、揚返場で大きなわくに移して荷造りされ、絹織物の工場に送られたり、横浜から外国へ輸出されていた。中込・野沢・白田では、若い女工じゆうこうさんや繭まゆや生糸せいしを売り買いする人たちがにぎわった。

県会議員であつた富太は、長野へ行く時に、平賀の家から小諸まで砂や石の道を人力車で行つた。小諸で鉄道に乗ると、しールの上をすべるように走る汽車に、文明のすばらしさを感じていた。

「南佐久にも鉄道がほしい」という願いは富太ばかりでなく、地域の人々の夢となった。その頃の日本では、各地に私鉄しせつをつくらつとする動きがあり、明治末には、東信軽便鉄道とうしんけいべんてつどうの計画が持ち上がった。